

高校生の表現指導と取り組んで

森 雅 代

一、はじめに

小学校教師を目指し、小学校教員養成課程で学び、卒業後一年間奈良教育大学附属小学校講師として勤務したのち、県立添上高校教諭となって二年が過ぎようとしている。高校教諭への転身は我ながら予想もなかったものであったが、わずか一年ながら小学校を経験した後、高校の教壇に立てたことは、わたしにとってこの上もない幸福なことだと思っている。年齢の差は大きいかもしれないが、教師と生徒という基本的な関係は、まず小学校において始まるものであり、高校となっても大きく変化することのないその基本を小学校で体験できたことはプラスになった。その意味で、初心を忘れないようにしている。

二、高校の国語教育

初年度は、高校一年生の副担任となり、一年古典と二年現代文に

取り組んだ。二年めは一年生の担任として、一年現代文、二年古典、三年国語表現と、いささか手を伸ばしすぎた形になっている。もっとも、学習指導要領改訂で今の高校にはわたしたちが慣れ親しんだ「現国」「古典一乙」などという科目はもはやない。

まず、高校教師になつてはじめてとまどったのはこの点だった。現行指導要領は、五八年改訂され、各高でカリキュラムの組み方は差はあれ、おおむね次のような要領で実施されている。「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」「現代文」「国語表現」の四つが柱となり、一年次では「国語Ⅰ」として現代文・古典をバランスよく履習する。(五単位)。二年次は「国語Ⅱ」として同様に七単位履習、三年次は「現代文」を三単位、「国語表現」を一単位、あとは進路に応じて「古典」を選択科目として履習する。

これは、わが勤務校の例であり、若干の違いはある。さらにわが校では、「国語Ⅰ」をAとBに、それぞれ三対二に分け、Aで現代文、Bで古典を行い、二年次では七単位のうち四単位を「国語Ⅱ」、

残りの三単位を「古典」と呼んで事実上分割している。

こうなつたには理由がある。「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」として、現代文と古典の両分野を平均的に履習するというのはなかなか難しいことなのだ。特に、古典の方は単位が少なく、基本的事項をおさえるだけが精いっぱい、本来の古典学習のねらいである文学としての鑑賞や、古人の生き方を知ることにより自分の現在や未来を考えさせるといった点にまで、手がまわらないでいる。

ならば、国A国Bと分けることなく、週五単位をフルに使って、ある時期は現代文、ある時期は古典教材と、集中的に取り組めばよいと言われるかもしれないが、かりに、ひとときでも「現代文」の授業がない時期があるというのは、翼をもがれた鳥のように心もとない感がある、というのは国語教師の考えすぎであろうか。

いずれにしても、とまどいながらのスタートだったが、現在では、国語という教科の単位数はなるべく多くあってほしい、という結論を得た。自身の高校生活をふり返ってみると、前述のように、国語という教科は「現国」と「古典」の二本柱という印象があるのだが、現在の高校生に最も必要なもの、つけてやりたい力は、文章をかく力・表現力だと思わされるのである。

三、高校生の「書く力」

先ほど、「かりにひとときでも学校から現代文のない日があると

したら、それは翼をもがれた鳥である」と書いたが、やはり、国語は全ての教科の根本であるという観を強くしている。

高校生と接して、まず驚いたことは文章力のなさであった。板書された事項はせつせとノートに写すが、「この部分を要約せよ。」「この点についてまとめよ。」と課題を出されると、とたんに手がとまってしまう生徒が多い。これは、ほぼ、どの学校にも共通した現象らしいが、小学校に勤務して、毎日何十冊という日記に日を通し赤ペンを入れていた身にとっては、実に物足りない思いがした。

「まとめよ」等の難しい課題でなくても、自分の心の中にあるほんのちよつとした思いさえ、文章にすることは苦手のようであった。ノートを集めて評価しようにも、全く同じ内容のものばかりでもしろくない。授業のはしげでひらめくようなことを、自分のことばで書けない。こんなことがあった。国語Bで、鈴木牧之の「北越雪譜」をとりあげ、「豪雪地帯の、雪にまつわる伝説や奇談を収録したもので、柳田國男の『遠野物語』の原型がここにみられる。」と話したあと、「遠野物語」について説明した。後日集めたある女生徒のノートに、「北越雪譜」……『遠野物語』……信じられないような伝説や不思議な話を集めたもの……初めて知った。読んでみたいなあ。でもそんなの売ってるのかな？」とあった。これは、本当に嬉しい例である。たいてい、題名と作者名だけノートにとって終わりという中で、たったこれだけの感想ではあるが、ノートに書

いてあったということにわたしは半ば感動した。と同時に、これらの書籍の存在や、文庫本としても比較的手に入りやすいことさえ知らないことに問題を感じた。

難しく考えることはない。心に思っていることを書けるように、なんとか書かせることはできないか、と思うようになった。はじめは小学生レベルの作文でもよいではないか。小学校時代に、ほとんど作文を書いたことがないというのなら、そこから始めようと思つた。

四、「国語Ⅱ」の中での表現指導

「国語Ⅱ」は、先ほど述べた通り、現代文古典両分野の網羅された一冊の教科書を用い、わが校は、二人の教師がそれぞれの分野を教えている。

現代文の分野を担当したわたしは当初、意気込んで授業をした。高度な内容をこなさなければならぬ、段落と段落の関係も把握させて……といういろいろ考えた。実際、そういう授業を行うと、生徒たちはノートを写すばかりで、どの程度自分たちの頭で考えているのか全くわからない。いざ指名してみると「わかりません。」あるいは沈黙が返ってくる場合がほとんどである。

高校ならばこそ、講義調の授業でも、それなりに押しきることができる。事実、二年生の生徒たちは、あとからきいたところによる

と「国語なんて、教科書の文章をひねくりまわして、先生が自分の考え押しつけるだけ」「論説、評論と聞いただけで頭が痛くなる」などの、国語に対する「見解」をもっていた。

こんな授業は、とても小学校では通用しない。その時感じたのはこれである。小学生は「話聞いてたら頭痛いけど、とりあえずノートだけはとっておこう。」などと考えてくれない。わからない授業は即授業そのものの破綻につながる。これではいけない。

この反省のもとに、「一人一人が活動できる授業」という原点に立ち戻って考えることにした。それには、やはり書かせることだ。それも、板書を写すのではなく、自己の考えを。

まず初めに行ったのは、毎時間のように、十センチ四方程度の小さな用紙を教室へ持っていくことである。授業のふしめふしめに、その用紙を各人に配り、「この描写は何について書かれていると思うか」「『それ』の指している内容は、本文中のどれか」あるいは、「本文に書かれてあるような自分自身の体験はないか」などと、次々に課題を与え、どんなことでもいいから書かせていった。不思議なもの、大きな紙を渡すと「たくさん書かねばならない」と意識するあまり、鉛筆が動かなくなるのだが、今すぐ回収されるという小さな用紙を配布されると、どうやら重い腰も上がり、書けるようになるのである。

この方法を続けることによって、生徒たちはだんだん、「自分の

考えを書く」ということにコンプレックスを示さなくなっていた。本来、彼ら、いや正確には、特に女子高生たちは書くことが好きではなくて、教室内、あるいは教室から教室へ、実にたくさんの紙きれ、便せんが行き交っている。授業中、ノートをとるふりをして「内職」すなわち、友だちへの手紙に精を出している者もいる。そのような私信になり、自分のさまざまな思いを、長い文章で書けるのだから、「文章書くのが苦手」であるはずがない。授業中、あるいは、課題として自己の意見を求められた時書けないのは、あまりにも授業であること、そして教師の評価の目を意識するからであろうと思った。

彼らに何か文章を書かせ、そしてその提出を求めた時、特に最初のうちは、彼らの書いた内容をできるだけ肯定するように努めた。必ずしも射していない意見でも、何か良い点を見つけたら、ほめことを添え、次回につながることを望んで返却した。だんだんに、これらの繰り返しだが、生徒のコンプレックスをやわらげていったように思える。例えば、小学生の日記指導と全く同じことを行ったわけである。

そのうちに、国語Ⅱの授業の中で、単に教科書の論説や、小説の教材を扱うだけでなく週に一時間程度、短文づくりの時間を設けるようになった。その中で、「けして……まい」「たぶん……だろう」など、陳述の副詞や、文のねじれなど、基本的言語事項を身につけ

させるよう努めた。彼らは、自分の興味関心のあるものには、非常に熱心に取り組みむ。

国語が嫌いで、文章を書くのは特に苦手だと言っていた男子生徒が、自分の大好きなバイクのことになる、その形状、あるいは架空の息づまる熱戦の模様などを、ルポライターも及ばないほど白熱の描写力をもって表現した。わが校では、単車の免許取得は禁止されており、彼とて単車に乗ったことがあるわけではない。しかし、「高校を卒業するまで、バイクに乗るのはがまんするしかないけど、書いていただけでも楽しいな。」と言うまでになった。自己表現のひとつの方法として、文章を書く、ということを見出せたことは、すばらしいことだと思う。しかし、二年生の終わり、最後の試験の日、彼の答案用紙の余白には「三年になって、先生がかわったら、提出物にバイクのことを書くことはもうないと思う。」と記されていた。妙に寂しい気がした。

五、「国語表現」を担当して

年度がかわり、前年度担当していたあるひとつのクラスの「国語表現」を担当して今日に至っている。このクラスには、あの「バイク少年」はいない。しかし、二年の国語Ⅱの授業をしながら、週一時間の短文づくり、小論文などに一番力を入れたクラスである。二、三年は組替えもなく、昨年行ったことを基礎に、いろいろな試み

ができる。

現に、文章を書かせ、それを添削し、返事を書き、返却していく中で、生徒との人間関係も強いものになっていった。同じ職場のあの先生が言われた。「生徒の書いたものを見てみると、自然に生徒を愛するようになりますよ。」その通りである。ふつうに授業をしていたら通りすぎてしまいそうな彼、彼女……。ひとりひとりの文章に接することで、明確に忘れがたくわたしの頭の中に残ってくる。

そのような明るい材料の中で、真正正銘の「国語表現」週二時間がスタートした。そして、その一年も終わろうとしている。

この一年でさまざまなことを行った。文の推敲、わざと不適切な表現の用いられている文章を例示して書き直させる、正しい敬語の使い方、原稿用紙の使い方によって小論文の書き方、入試用論文のポイント、文の要約の仕方、起承転結、そして正しい手紙の書き方など。週二回、毎時間課題を持ち込み、書かせ、そして評価して返却した。生徒たちもこれほど「書く」ことを強いられたにもかかわらず、拒絶反応を示すこともなく懸命にとりくんだ。しかし、年度末をむかえて、何か物足りない思いが残るのである。

二年がかりの取り組みで、確かに生徒たちは、書くことにある程度積極的にあたるようにはなった。が、この物足りなさは、やはり、この一年の「国語表現」という科目が、「授業」ならぬ「ワーク」の時間にしかなくなっていかなかったという点に起因しているのでは

ないかと思うのだ。

国語Ⅱの時ならば、ひとつの教材を行っている、その時間中に、教材とからめて生徒たちに書かせ、個人の意見も全体の場に返すことができ、授業が深まった。週一時間程度別ワークをとつても、昨日までの授業と関連させ思索しながら表現に取り組むことができた。やりたいこと、書かせたいことも次から次へと出てきた。評価するのも楽しかった。

ところが、皮肉にも三年になり、専用の時間ができると「次の時間は何を書かせよう」「ネタ切れ」などという事態が生まれてきたのである。そして、添削にも追われる。生徒の方も敏感にそういう状況を感じとり、半ば事務的に課題を消化して提出してくる。話し合い、教師が語り、生徒が考えするという、基本的な授業展開のない上に立った「表現」など、無味乾燥に近いものではないだろうか。授業開始と同時に、用紙が配られ、サラサラと鉛筆を動かして、提出して終了のチャイム、これでは、数学のテストとかわりないかもしれない。この一年間の国語表現を、このような使い方しかできなかった自分を反省している。生徒も楽しくなかっただろう。今度、国語表現を担当する時は、クラスの集団としての存在価値を生かす展開にしなければ、と考え始めている。

六、まとめとして

初めはどうしていいかまるでわからない。頭の中がカラッポのよう
に思える。強いられて、ぼつぼつと、自分の心の中にあるドロドロ
としたものの、ほんの一端を文字にして書き記す。ところが、書
いたとたん、それは公のものとなって自分の手を離れ、一人歩きを
始める。そこが手紙と違うところだ。

高校において、生徒から教師に提出される文章には、ある程度こ
のような性格があるだろう。少なくとも生徒はそう思っている。そ
して多くの場合、公になったその文章は、あまり高くもない評価を
得て手元に返ってくる。これでは、書くのがいやになって不思議
はない。特に、誰が書いたかを明らかにされることを嫌う傾向があ
る。優秀な作品であるとして、みんなの前で発表する場合でも、名
まえは言われたくない。恥ずかしいという思いの方が先に立つ。ま
ず、優秀な作品が優秀であると評価されることの正当性から教え、
慣れさせていかねばならない。

しかし、やがて自分の書いたものに一定の評価が与えられるのを見
ると、それが書くことへの自信として定着してくる。すると、も
はや、全クラス員の前で、「誰その作品」として発表されても平
気になる。完全に、公の文章が書けるようになったとみなしてよい。

高校における文章表現指導は、「私」から「公」の文章をどうひ

き出すか、という点にあるかもしれないと考え始めている。「私」
は自分の内面の感情、「公」は表向き、というような意味でこのこ
とばを用いているのではない。逆に、そのようなへだてをなくして、
コンスタントに自分を抽出し、他人の目に触れることを考慮に入れ
た上で文章化できるかということである。日記の文章は書けるが、
作文は一行も書けない、ということのないように、「公」の文章が
書けるということは本当の意味で飾らずに自分を表現することにつ
ながるのではないだろうか。

もちろん、「五」で述べたように、根本になる「私」同士のぶつ
かる場、たとえば授業中の討論などを抜かして、機械的に書かせる
ことに問題はあると思う。しかし、高校の教壇にたつて二年、まだ
まだ有効な試行錯誤を繰り返して、表現指導に取り組んでいきたいと
思う。実践と呼べるほどのものにもなっていないが、いつの日か、
高校生のもつ本来のパワーを、文章の上に表示させてみたい。

(奈良県立添上高校教諭)